

2012年後期 江戸の本づくり

第11回 庶民教育（寺子屋）の効果

はしぐち 橋口
こうのすけ 侯之介



文化的中間層の発見

江戸時代に入って百年経った頃から社会の様相がだいぶ異なってくる。それは書物の世界でも同じである。この期間の前半を読者の面から見ると、京都を中心に商業出版が軌道に乗り仮名草子などの新しい文学の生成があったものの、まだ読者の数は限られていた。寺子屋のような庶民教育が普及するのはもう少し先のことだし、各藩内部での教育体制も不十分だったので、高度な識字能力のある人たちの数は限られていた。

中世までの知識人であった僧侶や公家の層からは広がったものの、読者といえるのは、まだ一部の上級武士か医師、町人でも主要な都市の大商人くらいまでだった。これを「文化的上層」ということにすると、江戸時代前期はその層が少しずつ下に降りてくる過程だったと考えることができる。その意味で、17世紀末から18世紀初頭に読者層の変化・拡大があったことがわかってくる。

福岡藩に仕え江戸時代を代表する学者ともいえた貝原益軒には、伊藤仁斎、山崎闇斎などものべ数千人の弟子がいた。その弟子は武士だけでなく、武士の奉公人、町人、庄屋、医者、神主など広範な層に広がっていた。彼らが師匠の本の購買者になった。

上級の学者クラスとは別に、かろうじて識字能力がある程度の下級の層との間に、読書する習慣がついた中間層が生成してきたのだ。これを「文化的中間層」ともいうべき人たちがおり、この層の拡大が、江戸期における読書人口の拡大、出版物の増大の主要な基盤となったことが最近注目されている。貝原益軒などは早くもこの社会的存在に気付き、自らの文体を純粋な漢文体から、かな交じり文に変えていくことで、読者対象の拡大をはかったほどである。以後、益軒本は子どもや大衆向けの教育書の中心となった。



識字率（リテラシー）の高さ

明治七、八年当時日本に滞在した亡命ロシア人メーチニコフが書いた『回想の明治維新』（岩波文庫）にこんな記述がある。

「人足にんそく……別当（馬喰ばくろうのこと）……召使、さらにどんな店でも茶店でも見かける娘たち—彼らがみんな、例外なく何冊もの手垢にまみれた本を持っており、暇さえあればそれをむさぼり読んでいた。彼らは仕事中はそうした本を着物の袖やふところ、下帯つまり日本人が未開人よろしく腰に巻いている手ぬぐいの折り目にしまっている」

人足や茶店の娘にいたるまで暇さえあれば本をむさぼり読んでいた、というのである。明治新政府は新しい教育制度ができるまで、江戸時代の仕組みをそのまま利用していた。明治初年とはいえ、これは江戸時代からの継続なのである。

庶民教育の浸透 寺子屋の役割

幕府は、村でも町でも中間の役人層（庄屋や名主）を通して、つねに文書でのやりとりを求めた。通達や記録の保存、提出などすべて文字



でおこなうこととしていた。そのための基盤として読み書きを奨励したが、自らは初等教育をしたわけではなかった（幕府のしたのは大学レベルの昌平坂学問所のみ）。各藩でもほとんど初等教育をしていない。

そのため、子どもたちへの教育は純粋に民間で自主的に始まった。それが寺子屋である。

17世紀末から急速に普及し、享保年間（1720年代）には江戸府内のみで800校も開校したという記録がある。これは町奉行が各町名主に達しをして、手習師匠氏名とその弟子数を申告させ、その手習師匠に『六論衍義』という教訓の書物を分け与えたという記録に基づく。

大都市だけでなく、地方都市や農山漁村にまで浸透し、江戸時代末期には全国で三～四万校にも達したと推測されている（『国史大辞典』）。

中世から寺院が武士や庶民教育を担ってきたが、その寺に付属する教育者が「寺子」といわれており、そこから寺子屋というようになったといわれている。

江戸時代に入って寺院での教育から師匠の自宅にうつる。そのため手習い所ということも多くなる。として始めるようになり、都市部だけでなく農村部でも増大した。多くは20～30人くらいの規模だった。

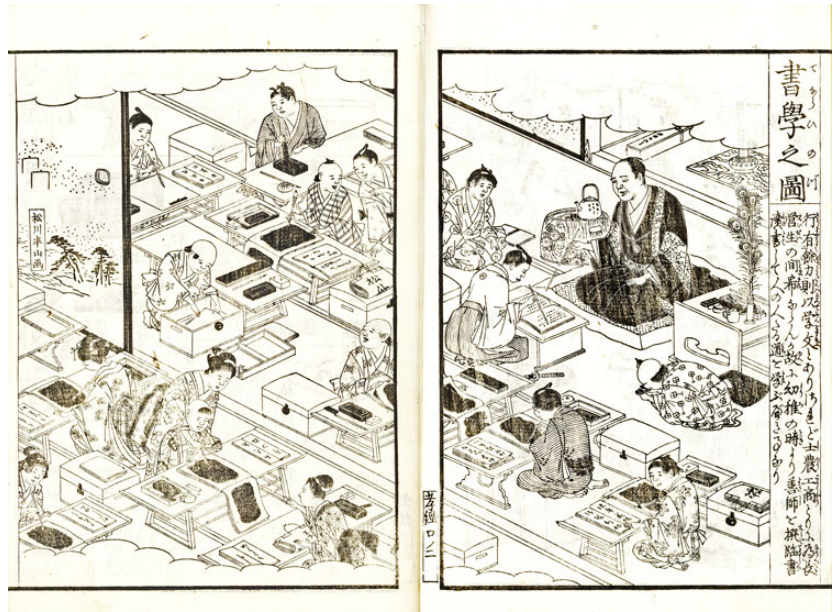
師匠となるのは、医者、書家、僧侶、神官などがいたが、多くは浪人である。江戸時代の浪人は本当はいい人だったのだ。

寺子屋は七歳くらいから十二、三歳まで朝から午後まで（今の小学校と同じ）、主として読み書き、算用（そろばん）が教えられた。ただし、師匠が前にいて生徒たちがいっせい聞いたり書いたりする今の学校をイメージしてはいけない。個性を重視し、一人ひとりにあったレベルで個人教育をした。女子もかなり受けており、江戸では男女ほぼ同数だったという。教師も三人に一人は女性だった。

教える内容は読み・書き・算（そろばん）のほかに一般教養があり、通う子どもの家の職業により、商業や農業の基本などもあり、さらに基本的学習分野とならんで書画・和歌・琴・茶・活花・裁縫といった女子にかかわる教養も出現した。合わせて躰けも行なわれた。

生徒のことを筆子といわれたようで、近代以降の学校と異なり、先生が大勢の生徒の前で画一的な教育をする方式でなく、個人単位でなされたところに特徴があった。その子供の年齢や理解度、人格に合わせて教えるのである。そのためもあって、師匠と教え子の師弟関係は密接で、筆子塚という師匠を偲んで建てられた墓標が各地に残っている。

中等教育も引き続き手習い所が担い、漢学や和学が国民的な素養になった。高等教育は藩がおこなう



藩校のほかに、漢学者や和学者の家塾、寺社などの宗教教育などいくつもの選択肢があった。俳諧、漢詩も家塾的な教育の場であった。

往来物という教科書は本屋のかせぎどころ

そもその始まりが、一年十二ヵ月分の模範的な往復手紙文の学習用素材だったので（庭訓往来という）、以後、寺子屋で使われた教科書を往来物という。実際には、往復書簡と関係のない内容でも往来物といった。御家流（おいえりゅう）という書法で、独特のくずし字だが、それが幕府の公認の文書用書体だったからである。しかし、それが読み書きできれば、文書を書き、大衆本を読むことができた。往来物にはたくさんの種類があって本屋全体で大量につくられた。競争も激しく、そのための本の頭部を利用して付録をつけ、そこに楽しい豆知識や図鑑を入れて競った。いまは、それを見るのもおもしろいものである。



読者層拡大の原動力

その結果、当時の識字率は、武士 100%、町民・農民などおよそ 50% に達したという。60%以上という説もある。

識字とは何かと考えると、この定義は曖昧である。自分の欲求する書物が読めて、手紙なり日記などが自由に書けるという意味での読み書きが十分にできるのであれば、問題なく識字能力があるといえる。それをリテラシーという。現代日本なら高学年の小学生のレベルだから、ほぼ百パーセントの識字率といえるだろう。

ヨーロッパでは識字率をはかる尺度を自分のサインができるかどうかではかるが、江戸時代はもっと実質的に本が読める程度である。二十六文字の組み合わせで文を構成する言語と、少なくとも千字の漢字を覚えなければならぬ言語を同一に論じることはできない。

享保以後、日本の人口はおよそ 3000 万人なので、少なくとも 1500 万人以上の読書人口があったことになる。読者層の拡大は書物の世界を変え、文学の質も変えていく。

それでも、日本の近世社会では、かなり高度な読み書きのリテラシーが備わっていたといえる。それは漢字を含めた読み書きであること、武士に限らず農民・町民のレベルまで広がっていたことを特徴としていた。しかも、幕府をはじめ藩などの公権力がかかわったのは一部の高等教育にかぎられていて、初等教育に該当する分野では、まったく民間の自主的な運営にまかされていたところが大きな特徴である。

ロシア人メーチニコフは「日本は……国民生活における教育と啓蒙の意義をはやくも理解していた世界でも数少ない国である。……書物的知識と文化が国民の最下層まで、血となり肉となって深く浸透している」ともいっており（『回想の明治維新』岩波文庫）、こうした日本の状況を喝破していた。

講義の要旨は pdf にするので、http://www.book-seishindo.jp/seikei_tanq/でダウンロードを。質問は、専用メールでいつでも。 khashi@s.email.ne.jp